

中国揚州出土の唐代青花

訳者：檜崎彰一 熊海堂

訳者まえがき

この訳文は『文物』1985年第10期に掲載された3篇の報告（1. 揚州新発見的唐代青花瓷片 概述 2. 揚州三元路工地考古調査 3. 揚州新出土両件唐代青花瓷碗残片）についてのものである。この報告が『文物』に掲載されてからすでに10年を経過している。この唐代青花瓷器の発見以来、中国においては青花の起源について、従来の元代起源説に固執する一部の研究者と唐代に遡ることを容認する2つの説に大きく分かれている。しかし、まだ一部にはこれを疑問視する考えもあって、まだ完全に結論が出たとは言い難い。

一方、日本においてはこの唐代青花瓷器についての関心はさほど高くない。しかし、日本古代の施釉陶器のうちに見られる、平安時代の白釉緑彩陶の源流を考える上で、この唐代青花瓷器は、きわめて重要な意味をもっていると考えられる。奈良末から平安時代にかけて大量の中国陶磁が輸入されているが、この唐代青花瓷器はまだ発見されていない。しかし、白釉緑彩陶の彩画技法は奈良時代の二彩とは明らかに異っていて、新たに平安時代に始まったものであると考えられるところから、その技法を考える上できわめて示唆的であると言い得よう。

なお今回、訳出するに当たって、3篇の報告を一つの文章にまとめ、各報告を章立てに編成し、別の題目を付けたことをことわっておきたい。また、本稿に掲載した写真のうち、一部のものについては鮮明化を期するため、揚州博物館の許可を得て、南京大学歴史系考古学研究室程立憲氏の撮影したものと差し替えた。揚州博物館並びに程氏の御好意に厚く感謝の意を表する。

一、揚州の新発見の唐代青花瓷片の概述

文化部文物局揚州陶瓷史研究訓練センター

青花瓷器はわが国古代陶瓷の中でも最も民族的特色のある優秀な種類の1つであって、古くから国内外の人々に喜ばれ、賞賛されてきた。近年、とくに70年代の末から、80年代の始めにかけて、浙江省などの地方において宋代の早期青花瓷片と青花瓷器の発見された記事が相次いでおり、さらに人々の青花瓷器に対する興味を引き起こし、青花瓷器の起源の問題について熱心な討論が展開されてきた。

今まで発表された論文から見れば、青花瓷器の起源の問題については大きく二つの見方に分れる。一部の研究者はすでに発見され、確認された元代の青花瓷器を出発点として、元代青花瓷器の工芸技術のレベルと完成度から研究と分析を行ない、青花瓷器は世界中の一切の事物と同じように、発生、発展と完成の過程を辿ったと考えている。彼らは浙江省から出土した早期青花瓷片の実物資料を引用して、青花瓷器は宋代、或は更に早く出現したはずだと考え、青花瓷器がわが国の南方と北方の製瓷業の間で相互の啓発、相互の影響、相互の参照が行なわれた結果を示しており、元代に至って景德鎮において、比較的完成された青花瓷器が生産されるに至ったと考えている。他の研究者は元代の青花瓷器の造型・裝飾・青花の顔料と青花料がみな元代の将作院から出たものであり、元代の景德鎮の生産能力と条件からみれば、かなり完成され、成熟した青花瓷器を創造して焼出することはまったく可能なことであって、長い期間の試焼、技術の掌握と、成

長の段階の必要はなかった。従って、元代の青花と唐・宋の藍（青色）彩とは直接な関係がなく、青花瓷器は完全に元代の官窯が利益をむさぼり取るために生産した貿易陶器であったことである。これは青花瓷器の生産が元代において、景德鎮から始まったとみる説である。

1977年第9期『文物』に「揚州唐城跡1975年の考古工作簡報」が載っている。その文中に1975年、南京博物院・揚州博物館・揚州師範学院の共同発掘調査団は揚州師範学院・江蘇農学院の辺りの唐代城址遺跡の発掘現地において、意外な1片の唐代青花瓷枕の破片を発見したことを述べているが、これは今まで報告された青花瓷器の資料のうち最も早いものである。この新しい資料の報告は人々の耳目を一新させた感があって「唐代青花」の説は我国の青花瓷器の起源問題の研究に新しい資料をつけ加えたものであった。残念ながら当時は1片しか発見されていなかったため、大多数の研究者は慎重さと、懐疑の態度でのぞみ、この問題についての深い研究と討論は進まなかった。

1983年秋冬の間、私達の訓練センターは一期の「中国古陶器の鑑別の学習クラス」の生徒達を連れて野外建築工事の現場に行き、授業と研究に価値のある資料を大量に採集していた。その中には明代初期の高温紅釉・元代の釉裏紅の堆花器・南宋の高麗青瓷・五代ペルシャ製の緑釉陶器片などがあり、これらはみな古陶器の精品であるが、一番注目されたのは青花瓷器の破片であった。

この新発見の青花瓷器の破片は造型・文様から見ると、早期青花の特徴が明瞭に示されている。肉眼と低倍率の拡大鏡で観察した結果、彼らの共通した見解は(1) 各級の器物は素地がみな粗くて重厚であり、胎土の色が灰白或は黄味がかかった白色のもので、素地の中はかなり細かい灰、黄、黒色の小砂粒が含まれている。このためはっきり小さい気孔が形成されていた。(2) 各級の器物は素地と釉の間に一層の化粧土を塗っており、器物の釉色は白色の中に灰色、または白色の中に黄色が泛んでいる。ある瓷片は乳白色を呈しており、大多数の瓷片の釉の表面には細密な貫入が見える。(3) 器物の内外および器の内底にも釉を施して、高台の部分は無釉である。高台は蛇の目高台と輪高台と二種類である。(4) 大多数の青花の文様は発色が鮮明である。一部の器物の色は比較的淡い色を呈して、青花の文様はみなぼかし文様になっている。青花料のなかに明るい黒色の結晶が見られる。結晶の部分はさらに濃い発色を示している。

次にこれらの青花瓷片を1点ずつ簡単に紹介し、関係する専門家・学者に提供して一緒に検討したい。

これらの新発見の青花瓷器の破片は訓練センターの標本室に8点が収蔵されている。青花瓷片は造型から見ると、壺・碗・盤の三種類に分れる。以下に別々に紹介しよう。

壺類の破片の1つを挙げよう。それは壺の胴部の破片で、口縁と注口の一部が残っている。瓷片の残存長は（口縁の残った部分も含めて測ったものである）9.2 cm、幅は7.5 cm、最も厚い所は1 cmあり、平均の厚さは0.6～1.7 cmである。壺の全体の形は比較的豊満な円形である。素地はロクロの上で成形したことがはっきりと判る。壺の外面の釉は総掛りで、内側にも釉があり、釉掛は不規則で、釉のなだれがひどく、施釉の過程で流れたように見えるので、浸し掛けであると思われる。壺の胴部には青料で描いた宝相華文様がある。釉層が薄く、地下に長年月埋まっていたため文様の色が非常に薄くなっている。

碗類の破片は大体4つの形式に分かれる。

I式の碗は、開口、深胴、蛇の目高台のものである(図1)。この残欠の器物は大小四つの破片を合わせたもので、完全な碗の約4分の1を占めている。残存長16.7cm、幅7.6cm、高台の幅は3.4cm、高さ0.6cm、破片の平均的な厚さは0.7cmある。この碗の破片の円径を求めて計算すると、その高台の直径は12.5cm、口径はほぼ24cmに達する。破片の底部に近い露胎の部分は細緻なロクロ成形と整形痕が見える。碗内の中心部に青料を用いて1つの菱形の文様が描かれている。菱形文様の角の上の部分に「卍」字形の花文が見られる。これは中心的な文様である。中心の文様の周辺にも「==」と「||」形の花文と1つ1つの花文を並べて補助的な装飾を施している。この種の装飾内容と体裁は特別の風格がある。それは1975年に揚州唐城遺跡で発見された青花瓷枕破片上の文様と似ている所が多い。青花の発色が濃艶で、青の中に紫色が透けて見える。青料の表面には黒色の結晶の斑点が見える。注目すべきことはこの器物の釉面の青花の文様が肉眼で観察すると水平ではなく、手でさわるとはっきり凹凸感がある。

Ⅱ式碗の形は広口で、口縁端は尖って丸い。体部は浅く、輪高台である。この碗のサイズは比較的大きい。破片の最も長い所は20.5cm、最も巾の広い部分は12.5cm、高台の直径は約12cm、高台の厚さ0.8cm、高さは0.6cm、碗の体部壁の平均的な厚さは0.6cmある。破片の比例によって計算すると、この碗の完全な形は口径が26cm位に達する。碗の外面には釉の剥落した部分があって、その部分には化粧土が露出している。碗の内面には凸形の稜線がある。碗の内面には青料で花とか流雲文を描いている。文様は複辨の団花を中心にしてその周りに四つの小団花文を対称的に配置している。そして花葉と藤蔓を口縁に向けて伸ばしており、その組合せは「十」字形、また「米」字形に配置している。この組合せの4弁小団花の間の空白部分に長脚如意

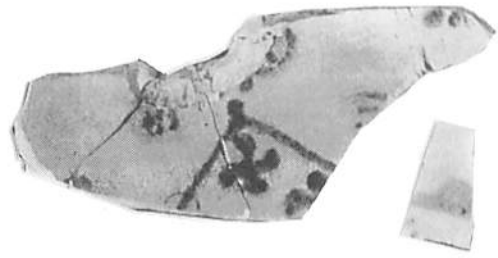


図1：第Ⅰ形式碗の破片



図2：第Ⅱ形式碗の破片

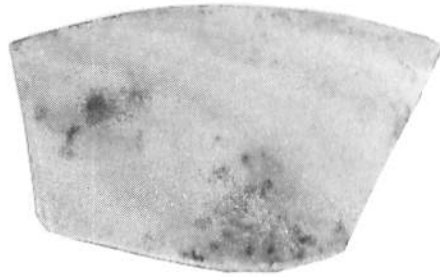


図3：第Ⅳ形式碗の破片



図4：盤の破片

頭の卷雲文を補助的に描いている。青花の発色は淡雅であるが青料はぼかしになっている。青花文の中に黒色の結晶を含んでいる。

Ⅲ式の碗の形は口縁が外反し、口端が尖って丸く、胴は浅い(図2)。破片は完器の約2分の1で、長さは13.3cm、幅は7.7cm、高台の直径は7.8cm、台脚の幅は0.7cm、高さは0.4cmである。碗の体部の平均的な厚さは0.5cmである。破片の比例によって計算すれば、完全な碗は口縁の直径が約16cmになる。碗の口縁部の内外にはみな釉のちぢれ現象がみられる。ちぢれ部分の釉色は比較的濃い水青色を呈している。碗の内側の口縁に近い所には凸状の稜線がある(比例によって約四つの線がある)。碗内の中心には青料で描いた1組の団花文があり、碗の口縁の内側には心象的な花草文が描かれている。

Ⅳ式の碗は輪花で、口縁は外反し、口縁が尖って丸く、胴は浅くて、輪高台である(図3)。この碗の造型は比較的精巧で、碗の体部の屈折は緩やかである。破片は完器の約3分の1で、三角形を呈している。破片の長さは約9-10cm、弧形の部分の長さは約12cmある。高台の幅は0.5cm、高さは0.4cm、破片の半径は約8cm、碗壁の平均的な厚さは約0.5cmである。碗の内側の口縁に沿って垂直に凸形の四つの稜線を施している。碗内の中央には青料で描いた団花が1つあり、碗の口縁内の周縁に沿って1つずつ小さい花文があって、青花の発色はやや薄い。

盤の破片は口縁部が外反し、輪花になっていて、胴は浅くて緩やかに屈曲している(図4)。破片の長さ10.8cm、幅は3.6cm、厚さは0.5cm、花卉状の口縁の内面に沿って凸状の稜線がある。盤の口縁部の内外には釉のちぢれ現象があり、ちぢれの部分には貫入がはっきりみられる。この破片は口縁部と胴部だけで、底部の様子ははっきりしない。口縁部には青料で1つの小さい花文を描いている。盤内の中心装飾ははっきりしない。

また幾つかの比較的小さい破片がある。1つは碗の口縁の部分で、口縁が垂直に立ち上がり、先端が尖っている。残りの長さ6.5cm、幅4cm、厚さ0.5cmある。破片の口縁の所には青料で1組の団花が描かれている、団花の上方に1匹の小さい蝶を描いている。全体の画面は生き生きとしている。もう1つの破片も碗の口縁部分で、胴の屈折した部分が少し残っている。口縁はやや外反している。残長4.7cm、幅3.2cm、厚さ0.5cmである。口縁に近い所に青料で1つの「十」字形の花葉を描いている。もう1つは小碗の底部の破片で、高台と碗の体部が少し残っている。破片の長さは6.2cm、幅4.7cm、厚さ0.5cm、高台の厚さ0.5cm、高さは0.4cmである。碗の内面中央には凸状の稜線がある。破片の釉色は白色で黄ばんでおり、碗の内面中心には青料で1つの団花を描いて、碗の体部にも団形の花文がある。破片から見るとこの器は比較的小さく、精細につくられている。またもう1つの破片はある器物の中間の部分で、器種は鑑別し難い。この破片の長さは4.2cm、幅は2.5cm、厚さ1.7cmである。器物の内外にも釉があり、釉色が比較的白く、青料で文様を描いている。

1ヶ所でこのように数が多く、造型の種類も多い早期青花瓷片が採集されたことは、当時この種の青花瓷器がすでに一定の生産規模を持っていたことを示しており、製瓷工芸と装飾芸術から見ると一定の生産のレベルに達していたことが判る。であるからこれらの青花瓷器の発見は私達に対して注意を喚起した。まずこれらの青花瓷器は年代をはっきりさせなければならないし、次に産地の問題、また焼造の技法の問題などである。この幾つかの問題を解決することはわが国の青花瓷器の起源を探究する上で、重要な意義があるはずである。

これらの青花瓷片はみな揚州市内の文昌閣の辺りの三元路の建築工事現場から集中して採集されたものである。この工事現場の範囲は東西に並んで、長さは約500mあり、3つの工事地区に分かれている。1973年5月から12月にかけて、南京博物院・揚州博物館・揚州師範学院の共同発掘調査団は、揚州師院・農学院の構内にある唐城遺跡に対して試掘を行ったところ、唐代手工業の工房遺跡と唐代の寺院の遺跡が発見され、そこから大量の唐代文物が出土した(『文物』1977年9期の「1977年揚州唐城遺跡の発掘簡報」参照)。その時の試掘現場はこの青花瓷片を出土した三元路の工地から遠くはなく、西北西の方向約1500mの所にある。1978年2月から5月にかけて、揚州市の石塔路から文河西路・淮海路・三元路・萃園路までの辺りの防空施設の工事中に、石塔路から文河西路の間から木造の橋脚の遺跡と木船の残骸を発見された。南京博物院と揚州博物館の現場の発掘調査班は、この遺跡に対して発掘調査を行ったが、橋脚は唐代の橋の遺跡であり、木船は唐代の遺物であることを確認した。この遺跡は青花瓷器破片を採集したところから西へ400mのところにある。地層の関係から見れば、揚州師院・江蘇農学院内の唐代の手工業の工坊遺跡と唐代寺院の遺跡は地表から約4-6m、揚州市石塔路から文河西路に至る唐代橋梁遺跡は地表からの深さが3.5-4mであった。これらの青花瓷片の埋蔵されていた深さは地表から2.3-2.5mである。いま持っている文献資料と考古資料から見ると、青花瓷片の出土した所は唐城の羅城の範囲内であって、当時唐代揚州の商業区内に当たる。揚州の地形の大勢は西北の方が高く、東南の方が低くなっている。地層関係から見れば、この青花瓷片が唐代揚州城内の唐代の地層から出土したことは何らの疑問もないところである。青花瓷片と一緒に採集されたものは唐~五代の越州窯の青瓷碗の破片・青瓷の瓜形水注・瓜形の壺の破片、邢窯の白瓷碗・盤の破片、寿州窯の瓷枕の破片・黄釉碗の破片、長沙窯褐緑彩の油合子の破片、褐藍点彩の壺・赤褐色の斑文ある水注の破片・赤褐斑文彫塑の貼花文壺の破片、河南省の中原地区の紋釉器の破片、鞏県窯の碗・盤・壺の破片と唐三彩の破片などである。同時にその中の1つの工事地区においても唐代の金・銀の装身具の入った窖蔵が発見された。これらの金銀装身具の造型と文様は西安・鎮江で発見された唐代の窖蔵から出た金銀器とよく似ている。これらと共伴した物はみなこの青花瓷器を唐代のものと認定する証拠になる。しかし、最も重要な証拠は青花瓷器自身である。その造型・文様から見ると必ず唐代の遺物であって、他の時代のものとは考えられない。

まず造型から述べると、この青花瓷片の中で壺・碗・盤があるが、最も多い物は碗、盤の破片である。壺の造型は重厚・豊満で、外観は丸くて流麗であり、非常によく唐時代の特色が出ている。碗・盤のサイズが大小不揃いで、造型はやや変化がある。出土した瓷片の中でⅠ式とⅢ式の碗の形、とくに蛇の目高台の器物は唐代の墓と窯跡からよく出てくる。この器物は中唐時期と認定する典型的な器物である。出土瓷片中、Ⅱ式碗と輪花の、胴の屈折した盤などの造型の特徴、製造技術から見ると晩唐時代の製品と思われる。その最も新しいものは五代まで降ることはない。また馮先銘の「河南鞏県古窯址調査紀要」に紹介された唐代鞏県の各種の製品によると、我々は唐代中期から晩唐にかけての鞏県のもの造型は「開口、曲胴で、口縁はやや外反して四つの花弁形になっており、碗内壁の口縁に沿って4つの縦に突出した稜線があり、蛇の目高台の碗」と「直口、浅胴、平底盤と四つの花弁形の口縁で口を截った所に4つの直線を突出させた、輪高台の盤がある」ことを知る。そして、以上のものは揚州で採集された青花瓷片中の碗・盤の造型と比べると非常によく似ている。これは早期青花瓷器を中唐から晩唐にかけての時期のものと判断

する証拠を提供したことになる。器物は遅くとも五代より新しいものとは言えない。

また装飾について述べる。これらの青花瓷片の装飾は大凡、内容的に3種類に分けることができる。1つは花・草・流雲文である。第2は動物文であり、また一部は図案文様である。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式の碗と宝相華・团華文・四弁小团華・鶴草蓮花文・如意頭形の卷雲文を主体とした輪花盤がある。これらの文様は唐代の瓷器のみならず、金銀器・銅器・石刻彫塑および刺繍品の上に常に見られるところである。それらは南北朝から唐代前期に至る仏教の盛行と関係がある。Ⅱ式の碗の上にある四弁小团華と如意頭形の卷雲文は唐代の銅官窯の釉下彩の瓷器および越州窯の青瓷の上にもよく見られる。ただ、越州窯の装飾は劃花の技法を採用しており、これらの青花瓷片は銅官窯瓷器と同様な劃花技法を採用していて、使用された装飾技法が異なっているが、同時代的な趣向を反映している。胡蝶・蜜蜂・蜻蛉・飛龍・鳳凰などの文様を装飾内容としたものは唐代にはよく見られるところである。唐代の長沙窯の製品の中に褐・緑彩の胡蝶・飛鳥文がしばしば見られる。唐代初期から五代にかけての越州窯青瓷に劃花手法の胡蝶・花卉文と印花手法の胡蝶・花卉文がよく見られるし、唐代の銅鏡の上にも鸞鳥・鳳凰・胡蝶・蜻蛉・蜜蜂などの文様を主体としたり、また補助的な文様としたものがよく見られる。これらの青花瓷片の中で動物・花卉文を描いたものはただ1片しか見つかっておらず、その絵の技術は細緻で、形は生き生きとしている。しかし青料はぼかしになっていて、この胡蝶の羽と髭は細かくははっきりと表現している。これは当時、彩画技術が一定の水準に達していたことを知り得る。Ⅰ式の碗の破片と小さい白瓷片に青料で幾何学文が描かれている。この種の幾何学文様を主体とした文様は唐代長沙窯の製品の中にもよく見られる。たとえば揚州唐城遺跡の文物管理所に収蔵されている幾つかの長沙窯の褐彩と緑彩の小壺の上にも、肩から胴にかけて褐彩あるいは褐緑彩を交互に配して、連珠で菱形・方形・鶏のハート形の文様に組み合わせたものがある。長沙窯のこれらの製品と揚州の青花瓷片の装飾との差は呈色剤から見て、一方は銅・鉄を用いた褐・緑彩であり、他は酸化コバルトを用いていることである。画法からみれば、一方（長沙窯）は連珠で文様を組合せているのに対して、他は文様を筆で描いていることである。しかし両者の風格は同様である。Ⅰ式碗の破片の上の主体的な文様と1975年に発見された青花瓷枕の破片に描かれた文様も非常に似ている。

わが国唐代白瓷の生産地の大多数は北方にあり、「南青北白」の様相を形成している。唐代の北方の白瓷の中では邢窯の製品の品質がもっともすぐれており、釉色は純白である。また工芸技術も細緻である。河南省鞏県・密県一帯で白瓷を大量に生産していた。そのうち鞏県窯の操業の歴史が長い。『中国古窯址瓷片展・図録』の解説によると、「河南省鞏県は隋代からはじまり、唐代に一大発展を遂げた。主に白瓷を焼いており、唐代開元時代には宮廷用の磁器を焼いていた。鞏県窯は唐代には三彩陶を焼いている、これはいままでも発見された唯一の三彩窯である。1959年に3ヶ所の窯が発見された。そのうち鉄匠炉村の窯の規模が比較的大きい」。これはわれわれに対してこれらの青花瓷片の生産地を考える上で啓発されるところが大きい。唐代に白磁を大量生産すると同時に三彩を生産した窯は今まで知られている実物資料としてただ鞏県窯だけである。とくに鞏県窯で生産された藍彩器と白釉藍彩の器はさらに人々に深く考慮することを求めている。これらはみな酸化コバルトを用いたものである。そしてこの種の酸化コバルトは青花瓷器を焼成する際のもっとも重要な原料の1つである。1975年、揚州ではじめて唐代青花瓷枕破片が発見さ

れた時、馮先銘先生はすぐ生産地について考察した文章を書いた。当時、香港の毛文奇先生の紹介した香港馮平山博物館に収蔵されている、1つの白釉藍彩の三彩壺の産地についても以下のことを指摘している。「情況から言えば、鞏県窯で青花瓷器を生産する条件は揃っている。例えば白胎・透明釉と金属コバルトを用いた白磁の焼成温度は1150℃前後まで出せることから鞏県窯はもっとも早く青花瓷器を焼いた可能性が極めて高いことが考えられる」。中国科学院上海硅酸塩研究所の人々はこれらの青花瓷片の中の一部について胎土と釉薬および青料について化学分析を行った。その結果、これらの青花瓷片の胎土の化学成分と河南省鞏県窯から出土した白磁片の分析による化学成分が非常によく似ている。しかし、資料が少ないため参考程度の価値しかない。しかし、これらのデータはこの種の青花瓷器が河南省鞏県窯、或は鞏県に近い窯の製品である可能性が高い。この見方が正しいかどうかは今後鞏県窯系の窯の発掘によって証明されるだろう。

上海硅酸塩研究所が行なったこれらの青花瓷片の電子線マイクロアナライザーの測定結果はそれ以後の釉下彩青花の電子線マイクロアナライザーの測定の曲線と非常によく似ている。だから揚州の青花は早期の釉下彩青花の可能性が高い。これらの新発見の唐代青花瓷片はわれわれに対して、以下の事実を教えてくれる。(1) これらの発見は1975年の揚州唐城遺跡から出土した唐代青花瓷枕の破片に対して1つの傍証資料になる。即ち、わが国封建社会の盛期である唐代において、すでに青花瓷器が出現していた。この種の青花瓷器は人々の今までの青花瓷器に対する認識と基本的に符合している。これらのものは酸化コバルトを呈色剤として用いた、高温下で一度焼きによってつくった釉彩磁器である。文様からみれば、これらはすでに簡単な点彩技法ではなく、筆で磁器の上に色々の幾何学的な文様あるいは中国の民族的特色に富んだ文様を描いていることである。それらが出現した時期は長沙窯の釉下彩磁器の出現した時期とほぼ同じである。

(2) これらの唐代の青花瓷片の器種は豊富で、数が多い。当時この種の青花瓷器はすでに一定の生産規模と生産レベルに達していた。これらの比較研究、およびその胎土・釉の化学分析を通じてこれらのものは河南省鞏県の付近の製品で、南の地方の製品ではないということが判る。

(3) これらの唐代青花瓷片の焼成技術、原料と装飾技術をみれば、後代の元・明・清代の青花瓷器と系統的につながっていて、本質的な区別はない。唐代青花瓷器と長沙窯釉下彩磁器の出現はともに当時の陶磁装飾技法にとって、時代を劃する革新的な出来事であった。これは当時の北方の無文の白磁と南方の単調な劃花・刻花・印花などの伝統的な装飾技法を超えたものであり、中国特有の水墨画の技法を製瓷業の中に取り入れたものである。これはその以後のわが国の陶磁器の装飾技法に新しい道を開いたものである。中国の民族的特色のある元・明・清代の青花瓷器にとって良い基礎を造ったものであり、さらに青花瓷器の完成に向けて一層の発展を促進させたものであった。

執筆：張浦生・朱戟
撮影：段毅強・朱戟

二、揚州三元路工業用地の考古学的調査

揚州博物館

唐代の揚州は、中国の歴史上有名な都市の一つである。ここ30年来、考古学者は揚州の唐代揚州の地下遺跡に対して一連の考古学的調査を行ない、大量の遺物を採取した。近年、土木建設工事の増大にしたがって、揚州においても幾つかの重要な発見があった。1986年の後半に始まった

市内三元路の建設工事中に、豊富な唐宋時代の遺物が発見された。以下、我々は、電信ビル所在の遺跡から採集された遺物及び調査の状況を簡単に紹介したい。

遺跡とその地層関係

電信ビルは三元路の北側にある（図1）。敷地は長方形で、面積は1500㎡。地層の深さは3.7 mある。西側のセクションを見ると、3つの層位に分けることができる（図2）。



図1：電信ビル建設工事現場遺跡位置図

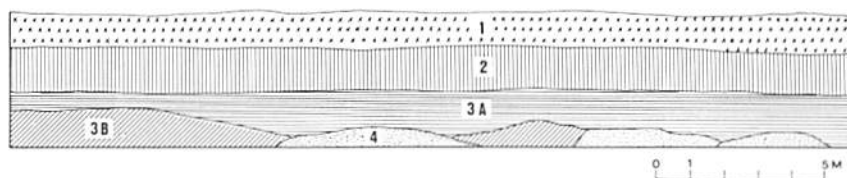


図2：電信ビル建設工事現場西端地層図

第一層は、表土で、瓦礫層である。厚さ0.9 m前後の近現代の瓦礫層である。

第二層は、灰土層で、厚さは1.4 m前後ある。主に明清時代の堆積層であり、青花瓷器の破片が出土した。

第三層は、灰黒色土層である。厚さは1.4 m前後で、主に宋元時代の堆積（3A層）と唐代の遺存層（3B層）である。この層の中から、大量の青瓷・白瓷・黒釉瓷などの瓷器とその破片が出土した。

敷地の各地層の中の遺物包含層の厚さは一様ではない。北側の最も浅い所は地表から2.6 mの深さであり、唐代の小さい灰坑が地層に深く入り込んでいる点を除くと、すべて宋代の包含層である。南側の最も深い所は地表から4.1 mであり、地層中に幾つかの小面積の唐代の包含層がある。一番下の地層の上に5つの灰燼の堆積と20ヶ所の灰坑がある。灰坑は長方形で、円形或は不規則な形を呈し、深さも不統一で、最も深い所は1.3 m、最も浅い所は、0.4 m前後である。灰燼堆積は、最も厚い所で1 mに近い。一般的に言えば、堆積層は草と木の灰燼と瓦礫を包含する雑土などであり、坑内には、大量の破砕した陶瓷器破片と動物の蹄骨、礪石などの遺物があった。25ヶ所の灰燼堆積の中に、唐代の灰坑が3ヶ所、灰燼堆積が5ヶ所、宋代の灰坑が16ヶ所、明代の灰坑が1ヶ所あった。この外にまた3基の井戸が発見されたが、その中の1つは宋代の井戸であり、ほかの二ヶ所は近代の井戸である。宋代の井戸は楔形煉瓦で築造しており、近代の井戸は扁平な形の煉瓦で造っているが、工事のため、底部までの発掘は行っていない。

この外、敷地の東端から14 m、南端から8 mの所に三つの湖石が積み重なっており、下の二つ

は生土に入り込んでいて、上の1つは重さ約100kg、厚さ30cmの不規則な石塊である。石の上に厚さ20cm前後の晩唐時代の包含層が覆っており（石は唐代の灰燼堆積の縁辺に位置する）、この遺跡の北方約10mの所にも二つの黄色石がある。

遺物

工事現場において、我々は大量の唐宋時代の瓷片と幾つかの比較的完整的な瓷器を採集した。この瓷器の素地は粗いものもあるし、緻密なものもある。素地の色は黄・白・青などである。釉色は白・黄・青・緑・味噌色・黒・褐色などである。また一部彩釉瓷もある。彩釉瓷の中で大多数のものは無文であり、印花・貼花・堆花紋で飾ったものは極めて少ない。器種は、日常用品が多く、盤・碗・皿・杯・鉢・洗・壺・合子などが主要部分を占めている。

以下、主として唐代の瓷器を紹介しよう。

遺跡全体のうち、工事地区に限られていて、下の地層の灰燼坑をすべて発掘することができなかった。しかし限られた唐代の灰燼坑の中から、大量の精美的な瓷片と完全な瓷器が出土しており、その中の最も珍しいものは、1点の緑釉の堆貼花文の龍文盤と1点の白釉青花盤である。

緑釉堆貼花の龍文盤は、高さ4.3cm、口径14.8cm、底径7cmである。四弁の輪花口縁で、口縁は外反し、胴部は丸く開いていて、裾張りの高台である。釉は総掛けである。盤の内面の中心に、堆貼手法で1匹の盤龍を施している。龍は尖った嘴を持ち、口を開けて珠を吐いており、鱗甲で覆われている。足の爪は3爪で、尾は粗くて短く、龍体を巻雲文で囲んでいる。口縁の外面と高台の近い所および、胴には4本、高台の中央は2本の線文で飾っている。全体の造型は唐代の銅鏡に見られる龍文と極めてよく似ている（図3、4）。

白釉青花盤は、素地が灰白で、吸水率が低く、質が緻密で、胎土の厚さは0.3～0.75cmある。素地の上に厚さ0.5cmの白い化粧土を塗っていて、外面に透明釉を掛けている。釉色は白くて黄味を帯び、釉溜りの部分は淡黄色を呈する。復元口径は14.4cm、高さ3.4cmある。輪花口縁は外反し、腰が屈折し、高台を持ち、四辨形の器形で、胴には相対して4本の真直な稜がある。各辨は巻雲文で飾っており、盤の内面の中心には、団花文がある。青料の発色はかなりぼけており、淡い藍色には濃淡が見られ、釉が溜ったところもある（図5）。

白瓷は、出土したものの中で、パーセンテージが高い。器種が多く、碗・盤・鉢などがある。素地は一般



図3：緑釉堆貼花龍文盤



図4：緑釉堆貼花龍文盤細部

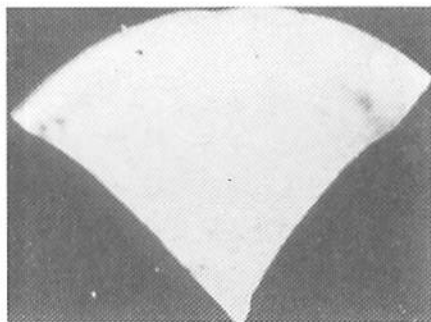


図5：白釉青花盤

的に緻密で白く、一部は浅黄色を帯びている。一部の器物の素地の表面に化粧土を施しており、釉は総掛けと半掛けものに分けられる。

白瓷碗は、5形式に分けることができる。第Ⅰ形式は、直口縁で、胴が丸く、蛇の目高台を付けている。碗の内面は総掛けで、外面は半掛けである。第Ⅱ形式は、口縁が小さく、胴は丸く、蛇の目高台を付けている。高台の下面は無釉である。第Ⅲ形式は、口縁が大きく、胴は丸く、蛇の目高台と輪高台の2種類がある。器の内面は総掛けで、外面は半掛けである。第Ⅳ形式は、輪花の口縁が外反し、胴は丸く、低い輪高台を付けている、総掛けと半掛けの2種類がある。第Ⅴ形式は蓮花形で直口、胴は丸く開いており、外面が半掛け、内面は総掛けである。

白瓷盤は、3形式に分けることができる。第Ⅰ形式は、輪花口縁が外反し、胴は斜に真すぐに立ち上がり、低い輪高台を持っている。器の表面は総掛けである。第Ⅱ形式は、輪花口縁、或は円形口縁で、腰が屈折し、輪高台は低い。第Ⅲ形式は、輪花口縁で、胴が丸く、内壁が屈折し、底は平らで、低い輪高台を付けている、高台の内面は無釉である。

白瓷鉢は、折縁の口縁で、胴は丸く、高台がある。内外とも総掛けである。

白瓷資料のうち、一種類は素地が堅く緻密で、形はかなり整っており、表面は無文で、釉色は銀白を呈し、釉溜りの部分が浅緑色を帯びるものがある。これは邢窯の製品の可能性が高い。もう一種類のものは、素地が比較的厚く、質が粗くて、よく焼結している。素地の色がやや灰黄色を呈し、釉色は白色の中に青色が現れており、釉溜りの部分は青緑色を呈している。その大部分は、丸口づくりで、五代定窯の製品の可能性がある。別のもう一つ種類のものは、その素地が粗鬆で淡黄色を呈し、釉面も粗い。これは鞏県の製品に間違いのないと思われる。他のものは、生産地がまだ判らない。

出土したものの中では、青瓷の量が一番多い。この青瓷は、素地が主に灰色、淡黄色、淡赭色の3種類がある。器形は、鉢・碗・盤・罐・壺・合子などである。

青瓷の洗は、1点ある。口径33cm、高さ12.5cmである。素地が灰白色を呈し、「T」字形の口縁で、胴が大きく膨らんでいて、平底高台を付け、器の内面は総掛けで、外面は半掛けにしている。

青瓷の盃は、比較的多い。みな破片である。器形が丸口づくりで、円形に近い胴を持ち、輪高台を付けていて、内外ともに総掛けである。

青瓷の鉢は、2形式に分けられる。第Ⅰ形式は、丸口、直胴、平底である。その一つの種類は、総掛けで、蛇の目高台或は低い輪高台を付けている。別の種類は、外面を半掛け、内面を総掛けにし、胴の4か所を褐彩で飾っている。平底高台の底面に7個の胎土目の痕跡が残っている。第Ⅱ形式は、丸口づくり、丸胴で、輪高台を有する。器の外面は半掛け、内面は総掛けで、内底下の中心に葉の文様が捺されている。

青瓷の碗は、5形式に分けることができる。第Ⅰ形式は、直口、長い丸胴で、蛇の目高台と平底高台の2種類がある。器の内面は総掛け、外面は半掛けにしている。第Ⅱ形式は、直口の丸口づくりで、長い丸胴形をし、平底高台と蛇の目高台の2種類がある。器の内面は総掛け、外面は半掛けにしている。第Ⅲ形式は、口縁が外反し、胴は丸く、輪高台と蛇の目高台の2種類がある。第Ⅳ形式は、丸口づくりで、真直に開く体部を持ち、蛇の目高台で、器面は総掛けと半掛けの2種類に分かれる。第Ⅴ形式は、口縁が外反し、丸胴、平底で、ハート形の高台を付けている。器の内面は総掛け、外面は半掛けである。

青瓷の罐は、二形式に分けることができる。第Ⅰ形式は、直口、短頸で、胴は丸く、平底である。肩の上に4つのアーチ状の耳を付けている。釉は内外とも半掛けで、剥落が見られる。第Ⅱ形式は、直口、瓜形或は筒形の胴で、肩の上に対称的に2個の耳を付けていて、平底である。

青瓷の水注。これは、小さい口縁が外反し、長胴形で、平底を持ち、口縁の近くに注口を付けていて、注口の下に褐彩の飾りがある。

青瓷の高杯は、直口縁で、胴が屈折し、平底で、高低2種の喇叭状の輪高台を付けている。釉は内面を総掛け、外面は半掛けにしている。その中に1個だけ完全なものがある。

青瓷の水注は、量が比較的多く、その中に、6点の比較的完全なものがある。3形式に分けることができる。第Ⅰ形式は、比較的大きく、口縁が外反し、頸が長い。オリーブ形をした瓜形の胴で、胴の前面に八角形の短い注口を設けており、反面には把手が付けている。肩に方形の堅耳があり、平底で、無文である。器の外面は半掛けにしている(図6)。第Ⅱ形式は、喇叭状の口縁で、頸が長く、瓜形或はオリーブ形の胴で、六角形の真直に立った注口を付け、反対に扁平な把手があり、平底である。あるものは注口の下に双魚文があり、器面は釉を半掛けにしている(図7)。第Ⅲ形式は、盤状口縁であり、頸が短く、筒形胴で、前に短い注口があり、反対面に円形の小さい把手がある。肩の両側に半環状の耳を付けており、平底である。ある器物は、褐彩で飾っており、釉は半掛けである。注口は長いものと短いものがあり、最も長いものは、6.5cm、最も短いものは、2cmしかない。水注の文様は双魚文・鶴文・武士文・草葉文・葡萄葉文などの多種類のものがある。あるものは褐彩を施している(図8)。

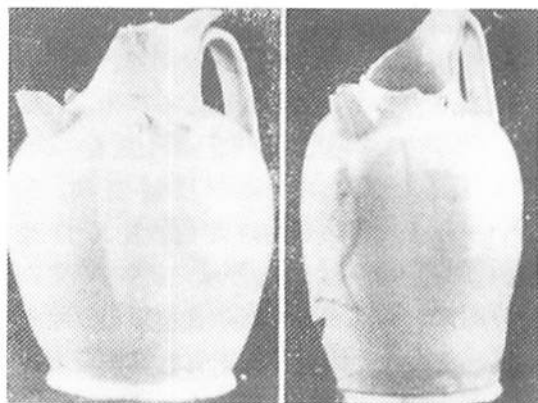


図6：第Ⅰ形式青瓷水注

図7：第Ⅱ形式青瓷水注

赤褐色釉の水注は1点ある。総高18cm。素地が灰色で、胴は卵形をしており、下が大きく、上は小さい。肩に口を水平に截った注口を付け、反面に幅広い扁平な把手を付けている。把手の上に浮彫の双魚文がある。肩の両側に連耳を付けており、平底で、器の表面は釉を半掛けにしている(図9)。もう一つのもは、総高8.5cm、素地は淡黄色を呈する。小さい口縁は外反し、頸部は直線的で長く、胴は瓜形で、平底である。器面は釉を半掛けにしている(図10)。

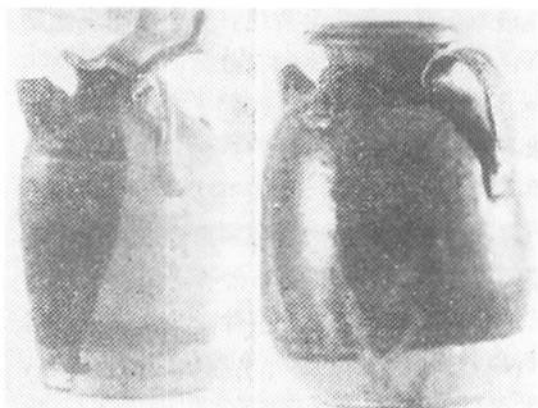


図8：第Ⅲ形式青瓷水注

図9：赤褐釉水注の1

赤褐色釉の罐は、1点。総高13cmある。素地は赤褐色で、身はオリーブ形を呈し、口縁はやや外反している。肩に双耳を付けていて、平底である。

他に、また幾つかの壺・罐・燈明皿の破片もある。

白釉緑彩器は、主に盤と碗の2種類がある。碗は、2形式に分けることができる。第Ⅰ形式は、淡紅色の素地が粗鬆で、口縁は広く、丸胴で、平底高台を付けている。碗の内面は白釉を総掛けにし、緑彩を施し、外側にも底まで緑釉を掛けている。この碗のサイズは比較的大きい。最大のものの口径は34cm、底径13cm、高さ8.5cmである。第Ⅱ形式は、淡黄色の素地が粗鬆で、直口縁をなし、長胴形で、幅広い輪高台を付けている。釉は総掛けで、碗の内面に条線状の緑彩を施している。外面には塊状の緑彩が見られる(図11)。

黄釉褐彩盤は、数が少なく、比較的完全なもの1点しかない。それは淡黄色の素地で、口縁が外反し、丸胴で、蛇の目高台を付けている。内外とも釉は半掛けで、内面の中心部は露胎で、鉄紅色の顔料で草葉文を描き、回りに不規則な施条文を施して、釉下彩絵は褐色を呈している(図12)。

青釉緑褐彩花卉碗は、灰色の素地である。口縁は輪花状で、端部が外反し、体部は緩やかな丸味を帯びていて、低い輪高台を付けている。外面は半掛けで、口縁の部分に褐色・緑色の二色の顔料で4組の草葉文を描いている。碗の内面の中心には褐・緑彩の花文がある。窯変によってできた赤色の短い条線が見られる(図13)。

彩絵青釉盃は、淡灰色或は淡紅色の素地で、口縁部は直立し、長胴形で、平底高台を付けている。内面は総掛け、外面は半掛けである。口縁の下に2つの孔があり、孔の外に貼付文がある。其の一つには、赤褐色と緑色の2色の彩絵があり、別の一つには孔の所に大きく赤褐色釉を掛けている(図14)。



図10：赤褐釉水注の2

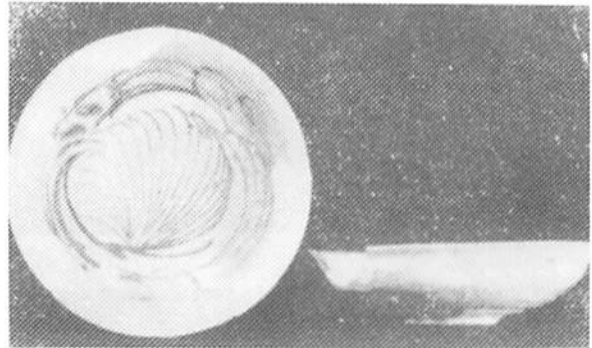


図12：黄釉褐彩盤



図11：白釉緑彩碗



図13：青釉緑彩花卉碗

彩絵青釉罐は、口縁が真直に立ち上がり、肩が狭く、胴は丸い。底部は残っていない。肩の両側に鳥尾状の環状の双耳を付けており、回りに緑彩の連珠文を一周させている。外面には赤褐色文を繞らし、胴には緑・赤褐色の二色を交互に用いたハート形の文様を描いている（図15）。

黄釉彩絵壺は、灰色と淡黄色の素地である。一つは注口の下に藍・褐色で描いた唐草文があり、注口の側に褐彩で1つの篆字が書かれている（図16）。 もう一つは、胴に褐・緑彩で1匹の飛雁を描き、その下に唐草文を配している。

灰白釉緑彩壺は、口縁が欠失しているが、胴が扁円形の瓜形を呈し、平底高台は別に作って身と接合したものである。身は灰色の釉を半掛けにしその上に大きく緑釉を掛けている。釉面には多数の禾目文があり、釉際には釉溜りの結晶が見られる。破片の断面から見れば、肩の前に注口があり、背面には扁平な環状の小把手を付けている（図18）。

また、灰白釉緑彩盤・碗・鉢などの破片もある。

それ以外に、また2種類の黄釉枕の破片がある。みな淡黄色を呈する粗い素地で、素地は重厚であり、底部を除いて他の部分は総掛けにしている。別の1点の枕は、表面を団花文で飾っている。

また電信ビル工事の敷地から、大量の宋代瓷器が出土している。

宋代の瓷器のうち、白磁は主に定窯の製品であり、器種は盤・碗である。青瓷は、龍泉窯の製



図14：青釉彩面盃



図15：青釉彩面罐



図16：黄釉彩面篆字壺

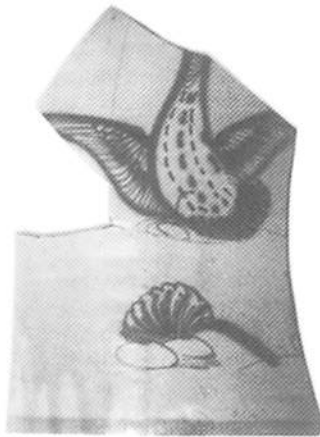


図17：黄釉褐緑彩雁文壺

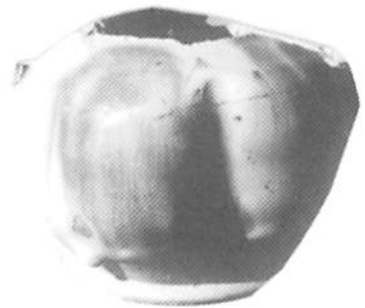


図18：灰白釉緑彩壺

品が主体になっていて、器種は、碗・盤であり、他に三足香炉、合子などもある。青白瓷器は多いし、品質も高い。主に景德鎮窯の製品で、器種の判るものは、碗・盤・鉢・罐・盆・香炉・合子などである。とくに珍しいものは、黒褐色釉彩絵瓷器が大量に出土したことである。この類の瓷器は、主に、兔毫釉・油滴釉・玳皮釉と吉州窯の切り紙の貼花の瓷器である。この他、また磁州窯系統の白釉褐彩の瓷器と少量の赤褐色釉の俑の破片も出土している。

小結

8ヶ所の唐代の堆積層から出土した遺物は、非常に豊富である。まず遺物から造型・装飾・釉調などをみれば、今回出土した唐代瓷器の産地の知られるものは、長沙窯・寿州窯・越州窯・岳州窯・鞏県窯である。宋代の瓷器で産地の知られるものは、景德鎮湖田窯・龍泉窯・定窯・吉州窯・建窯・磁州窯などである。唐代と宋代は、わが国の貿易瓷器の生産の盛な時期で、揚州は、当時の港町として、各生産地の製品が集まっていたことは当然なことである。

今回発見された非常に珍しい瓷器は、例えば、唐代の青花瓷片である。これらは唐宋代の瓷器の類型・流通と海外貿易の状況を研究する上で非常に重要な資料を提供したものと見える。

調査執筆者：馬富坤 王 兵 印志華

撮 影：古 建

三、揚州新出土の2点の唐代青花瓷碗破片

顧 風 徐良玉

1983年11月上旬、我々は揚州市内の文昌閣の東の、三元路の北にある工事区域（甲地と略称にする）で、1点の早期青花瓷碗の破片を採集した。半月後、また甲地から西へ約100mの所にある別の建築工事区域（乙地と略称する）から、別の青花瓷器の破片を採集した。

この2ヶ所は、東西方向の直線上に並んでいて、唐代の羅城の範囲内に位置し、宋・元・明・清時代の旧城の範囲内に当たっている。この甲地の工事面積は、約1,200㎡、工事の深さは、平均して約2.2mである。この場所の地層の状況は比較的複雑で、工事区域の東側の攪乱層の下からは、すべて明代の青花瓷片が出土した。工事区域の西部と中部の北の部分では、既に、唐代の遺物が出土している。ほかの地区では、主に宋・元時代の瓷片が出土している。第1点の早期青花瓷碗の破片は、工事区域の南端から1.5m、西端から13.5m、地表から1.8mの深さから出土したものである。乙地の工事の面積は、甲地とほぼ同じ大きさである。工事区域の平面形は曲尺の形をしており、工事の掘鑿の深さは平均して2.2mである。工事区域の一番下の地層から主に唐代の遺物が出土したが、とくにここから2点の早期青花瓷器の底部破片と高台形式・造型・胎土・釉薬の特徴が同じである大量の同時代の白瓷資料が出土した。第2点の青花瓷器は、工事区域の北の方に突出した場所の北端から約4m、東端から1.8m、深さ2.2mの所から出土したものである。この青花瓷器と共伴したものには、蛇目高台を持つ越州窯の青瓷碗・罐の破片、長沙窯の点彩・貼花文の破片・壺の破片、中心に点彩のある碗の破片、邢窯の白瓷碗の破片、寿州窯の黄釉瓷碗の破片、及び一部の三彩陶片と緑釉黄胎のペルシア陶片などがある。

甲地から出た青花瓷碗の破片は、口縁部と底部の2分の1に近い部分しか残っていなかった。残存した口縁の弧の長さは12.6cm、口縁から器底の中心を経て欠けた所までの長さは20.8cmある。上から見ると楔形に似ており、器の内壁に真直な稜があり、4つの花瓣からなる輪花碗と考えら

れる。復原の高さは約 5.9cm、口径が約 24cm、底径 11.7cm である。口径と底径の比は約 2 : 1 になっている。形は豊満で、素地が厚くて重い、口縁の部分は薄くなっており、下に行くに連れて段々厚くなっている。素地は比較的粗く、気孔が見え、色が淡青灰色を呈している。全体に白釉を施しているが、ただ高台の端部だけは露胎になっており、器の中心付近には胎土目の痕跡が残っている。釉色は白の中に乳黄色を泛び、釉層が薄くて少し貫入が見られる。釉の下は化粧がけをしている。青花の発色は比較的良いが、中には沢山の釉むらが見られる。このような特徴は、1975年揚州師範学院の唐代揚州城の遺跡から出土した青花瓷枕破片とよく似ている。器の内面の文様から推測すると、その主要の文様の配列は「十」字或は「卍」字の形を呈している。器の中心には重瓣の青花大団花が描かれており、団花の四方から1本ずつ藤蔓が延びていて、その上に、4つの単瓣の団花がある。その中の2組は上に向いて開いた花卉を、2組は横向きに咲い

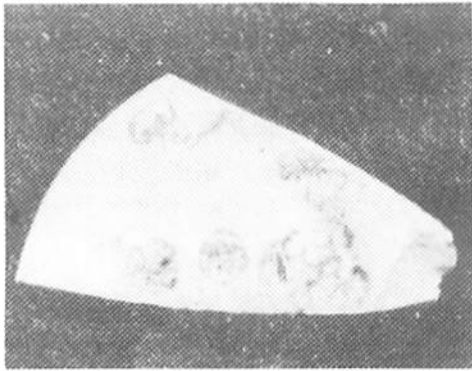


図 1 : 青花碗破片の 1

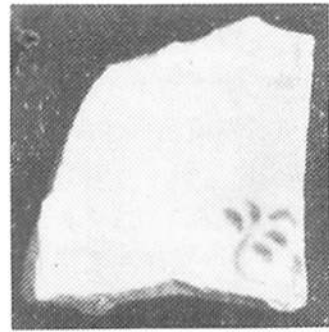


図 4 : 青花碗破片の 2



図 2 : 青花碗破片の 1 の文様模写 (1/3)



図 5 : 青花碗破片の 2 の文様模写 (1/2)

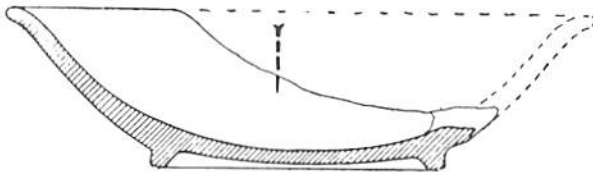


図 3 : 青花碗の 1 の断面図 (1/3)

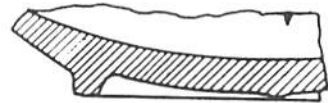


図 6 : 青花碗の 2 の断面図 (1/2)

た花卉を描き、藤の茎の端に近い所で2つの外に巻いた若い芽がある。この2組の文様の間の空白部分の口縁に近い所に2つ或は4つの靈芝形の足の長い卷雲文を描いている。文様の全体の構成はバランスがよく取れていて、筆使いは簡潔で、描線は流暢である(図1、2、3)。

乙地から出た青花瓷破片は、碗の体部の一部と高台の4分の1が残っていて、上から見ると、扇形をしている。扇形の弧の長さは13.8cm、半径8cm、底径10.8cmあり、器のサイズは、甲地の破片より小さい。素地の色が黄味を帯びている点を除くと素地・釉薬の特徴、高台の形などは、甲地の青花瓷片と全く同じである。青料は甲地のものより厚いが、発色は前者より悪く、青花の中に同様な釉むらが見られる。文様には比較的簡単で、器の内面中心に1本の卷草文を描いているのみである。内壁にはまた直稜がある。碗の残りが少なすぎるので全体を復原することができない(図4、5、6)。

この2点の青花瓷器の破片は、素地の上にみな一層の白い化粧土を施しており、釉層が比較的薄く、青花の発色と素地の色が異なっていて、表面から見ると、焼成技術が異なっているように見える。前者の青花の発色は綺麗な青緑色で、手で触ると凹凸感がなく、釉下彩技法が採用されているらしい。後者は、青花の発色が灰色を帯びた藍色で、青料を釉面に厚く塗っているようであり、手で触れると、明らかな凹凸感があって、三彩器の状態と似ている。1979年、揚州師範学院の唐代城址遺跡の中から出土した青花瓷枕の破片も同様である。これらはみな釉上彩の技術を採用して作ったものである。釉下彩青花の作り方を解明するために、我々は、20倍率の虫眼鏡を使って、その断面を観察した結果、この早期の青花は、青料を釉の上に施してから、高温の中で溶けて釉層の中に熔け込んだものであることが判った。また我々は、釉下彩の技法を採用した元・明・清の青花の釉層を観察した結果、確かに唐代青花と異なっていることを知ることができた。甲地から出た早期青花瓷片は、青料が釉の上で形成された界線がはっきりと見え、釉中に溶け込んだ青料の下部の輪郭は不揃いで境がはっきりしない。青料も釉下の化粧土に及んでいない。反対に、元・明以後の青花は、青料が釉の下で形成された界線が、明らかに素地の中に浸透している痕跡がよく見える。逆に一部のものは、上の釉層との界線がはっきりしない。我々はこの早期青花が釉上彩の技法を採用した可能性が高いと考えている。つまり、先ず生素地の上に釉を施してから、釉の上に青料で文様を描き、最後に窯詰めをして、一度焼きで焼成したものである。或は、先ず白瓷を焼いてから、その上に青料で文様を描き、再び窯の中で二度焼きをした可能性もある。コストの面から考えると、1度焼きの釉上彩技法を彩用した可能性が高いと考えている。

この早期の2点の青花瓷の発色と素地の色の違いについては、焼成する温度差と関連しているかもしれない。前者は温度が高いため、青料が釉の中に比較的よく溶け込んでいる。青花の発色が良く、また釉面に凹凸感もなく、釉下彩の青花と殆ど区別がなくて、素地の色も淡い青灰色を呈している。後者は温度が低いため、青料が釉の中で十分に融けない。したがって、青料の発色は灰黒色を呈し、表面も明らかに凹凸感があって、素地の色も黄味を帯びている。つまり2点の早期青花瓷碗の破片は、その造型・文様の題材だけではなく、焼成技術の面でも一致している。

2点の早期青花瓷片は、素地・釉薬・造型の特徴からみると、河南省密県西関窯と鞏県の鉄匠炉地方・白治河一帯の窯で造った唐代白瓷とよく似ている。1962年3月、河南省文化局文物工作隊は、密県の西関窯の唐代の窯址から若干の白瓷器を採集した(注1)。その中の第Ⅱ形式の瓷盤(実は「碗」と見られる)は、報告によると、「素地は灰色であり、広口で口端が丸い。碗

の体部は斜めに真直に開き、下に輪高台を付けている。器の内外は白釉或は黒釉の2種の釉薬を掛けているが高台の部分は露胎である。その中の1点の白釉器は、高さ4.2cm、口径16.6cmである。』とあるが、この高さとの口径の比率は1:4になっている。高さとの口径の比率は器物の基本的な形を決定する重要ポイントであるが、甲地から出土した青花瓷碗の破片の胎土・釉薬の特徴が似ているだけでなく、高さとの口径の比率もちょうど1:4であった。

1959年7月、馮先銘氏などが、河南省鞏県の窯跡を調査した際、若干の白釉瓷片を採集した。その中には碗類だけでも11種類に及んでいる(注2)。その第1・2・4・5・6・11の形式ものは、胎土・釉薬・造型の特徴がみな揚州から出土した2点の白釉青花碗と似ている。とくに第11形式の碗と第1形式の盤は、「高さが6.6cm、広口の口縁で4輪花の形態をしており、碗の内外と輪高台には釉を総掛けにしている」。その盤は、「高さ4.5cm、口縁が4輪花になり、各弁の境に突出した直稜があり、輪高台で、碗の内外と高台内にまで釉を施している」と記載されている。以上の特徴は、揚州の2点の唐代青花碗片とよく似ている。したがって、我々は、この2点の早期青花碗の破片が「唐代河南鞏県窯の製品」という可能性が極めて高いと考えている。

文様の配列の形式と内容は、年代を決定するもう1つ証拠とすることができる。唐代文様の配列の特色の1つは、円形或は楕円形の器物の上に、単独の文様を間隔を置いたり、繰返えして用いていることである。一般的には、1つの花を中心にして、捲いている蔓莖で4等分或は5等分に分割する方法が多く見られる。揚州の青花碗片はわが国の伝統的な「米」字形の文様の配列を採用しており、バランスがよく調和の取れた特徴を呈している。このような文様の配列は盛唐以来の装飾技法の特色である。

次に、花草を写生して文様装飾とすることは唐代の風格の1つで、当時の工芸品の上によく見られるものである。例えば、新疆トルハンから出土した唐代の織物(注3)、揚州から出た唐代の銅鏡(注4)、河南省上蔡賈荘の唐墓から出土した漆器などで(注5)、唐代永泰公主墓・懿徳太子墓・韋洞墓の石棺に線刻された人物画の中にも、よく花草文を用いて飾ったものが見られる(注6)。揚州の2点の青花碗の文様は、以上の各例の装飾と同様である。

この外、靈芝形の卷雲文を補助的な文様とすることは、唐代にもよく見られる。例えば、揚州から出土した「雲龍文鏡」・「双鳳文鏡」・「月宮物語鏡」(注7)、揚州東風煉瓦工場から出土した長沙窯のアラビア文字のある背負の水壺(注8)、故宮博物院に収蔵されている唐代の石刻(注9)などの上にも、みなこの様な雲文がある。これらの雲文の描き方と形は、甲地から出土した青花碗の破片の中心の文様中にある靈芝形の卷雲文ともよく似ている。

年代を正しく判断する為に、我々はまた、李知宴氏の唐代瓷器の編年資料(注10)を参考にした。その中で第1形式の碗の編年について、以下の様に述べている「初唐の特徴は、碗の体部が真直で長く、平底高台をつけている……、玄宗皇帝の天寶年間以後、口縁が外反し、碗の体部がやや湾曲して、底部に輪高台をつけている。代宗皇帝の大暦年間以後の碗は、口縁が外反し、碗の体部は真直に開いており、あるものは口縁と碗の体部を荷葉形に作っていて、高い輪高台をつけている」と書いている。そのほか唐代の各時期の施釉技法が異なっている。初唐の施釉技法は比較的粗雑に処理しており、釉を器物の上半部にかけたものが多く、内外を総掛けにしたものは非常に少ない。釉のなだれ現象は普通のことであった。盛唐以後、施釉技法が上達し、製作技術もまた改良され、彩釉陶器も大量に出現した。いまの認識のレベルから、この関係資料を総合判

断するとこの揚州の2点の青花碗の焼造年代は、上限が中唐から、下限が五代までであると考えている。

1975年、揚州師範学院の唐代城跡から出土した青花瓷枕の破片の文様は、異国風であり、その産地を決めることができず、今までまだ陶磁学界に普遍的な認識が出来ていない。最近揚州から出土した2点の青花瓷碗は、器形がはっきりし、文様も比較的はっきりしていて、典型的な中国風のものであり、産地も明らかになったが、このようなことは、非常に珍しいことである。

注記

1. 河南省文化局文物工作隊「河南密県、登封唐宋窯址調査簡報」『文物』1964年第2期。
2. 馮先銘「河南鞏県古窯址調査紀要」『文物』1959年第3期。
3. 陳娟娟「新疆吐魯蕃出土的幾種唐代織錦」『文物』1979年第2期。
4. 7、周欣、周長源「揚州出土の唐代銅鏡」『文物』1979年第7期。
5. 河南省文化局文物工作隊「河南上蔡県賈荘唐墓清理簡報」『文物』1964年第2期。
6. 陝西省文管会「唐代永泰公主墓発掘簡報」『文物』1964年第1期。陝西省博物館、乾県文教局唐墓発掘組「唐懿徳太子墓発掘簡報」『文物』1972年第7期。陝西省文管会「長安県南里王村唐葦洞墓発掘記」『文物』1989年第8期。
8. 朱江「揚州出土の唐代アラビア文背水瓷壺」『文物』1983年第2期。
9. 故宮博物院陳列設計組編繪『唐代図案集』1982年、人民出版社。
10. 李知宴「唐代窯窯概況与唐瓷の分期」『文物』1972年第3期。